

わゆる「固有の重商主義」と呼ばれる諸理論、あるいはその他の重商主義的諸理論の展開過程をくぐることを不可欠とするものお、アダム・スミスにおける古典派経済学体系に体系的に連絡するものとして、古典派経済学体系の出発点、創始として位置づけられなければならない。市民革命と産業革命をつなぐ、理論体系形成過程における非連続の連続の構造こそがベティの学説史上の位置を明らかにする視角であろう。

④ かくしてまた、この視角からの残された緊急の課題は、ペティ・ロック関係の再検討による市民革命経済理論として、イギリス古典派経済学の出発点、創始構造の抽出である。

以上

## 共同研究室

昭和四七年度第一一回研究会(昭和四八年一月十九日)

▼テーマ ソビエトの諸研究所を廻って

報告者 芦田文夫氏

昭和四七年度第一二回研究会(一月二六日)

▼テーマ 現代巨大企業の独自の生産単位に

ついて——工場結合体、コンビナー

トの実証的分析——

報告者 坂本和一氏

### 報告要旨

(以下では、報告の実証的部分はまったく省略し、結論のみを要約する)

### I 問題

第一 現代の支配的な産業資本、巨大産業資本の直接的生産過程の構造を分析するための表象、分析対象を確定すること。すなわち、それがどのような発展形態の生産単位において実現されている産業資本の直接的生産過程であるかということをおきらかにすること。

第二 現実と理論、資本論における産業資本の直接的

生産過程の理論とのずれをあきららかにし、『資本論』の理論における分析対象の歴史的制約性をあきらかにすること。したがってまた、現代の『資本論』の理論のため新たな分析対象設定の必要性をあきらかにすること。

Ⅱ 『資本論』における産業資本の直接的生産過程(第一部第二〜六篇)の理論の表象Ⅱ分析対象

まずはじめに、以下の分析の基準として、『資本論』における産業資本の直接的生産過程の理論の分析対象をあきらかにしておく。

まず『資本論』では、工場において実現されている産業資本の直接的生産過程が分析対象とされている(本来的マニユファクチュアや初期マニユファクチュア単純協業経営で実現されているそれではない)。この点は、すでに自明のこととなっている。第一部第三章「機械と大工業」第一節「機械の発達」および第四節「工場」をみよ。

さらに『資本論』では、このような産業資本の直接的生産過程が実現されている工場について、具体的な表象が設定されている。ここでは、この点が問題である。そこで、このような『資本論』における工場についての具体的な表象をみて

みると、それはつぎの二つの点を基本的な内容としていることがわかる。――

第一 機械体系を骨格として生産の行なわれている作業場(道具によるものではない)であること。

第二 一個の建築物によって包摂されている作業場であること。

ただし、わたくしたちにとって、第一の点はすでに常識となつてはいるが、第二の点はこれまで明確に意識されて理解されていらない点である。しかし、ここでこの第二の点を工場という場合の表象の内容として明確にしておくことは、以下にみるような現段階のもっとも発展した生産単位の表象的把握のためには不可欠である。なお、この第二の点の理解のためには、第一部第三章第一節「機械の発達」におけるつぎの文章、とくに傍線部分をみよ。――

「伝力機に媒介されてのみ一個の中央的自動装置から運動を受けとる編制された諸作業機の体系として、機械経営はその最も発展した姿態を有する。この場合には個々の機械の代りに一個の機械的怪物が現われるのであつて、その体軀は全工場建築物(ganze Fabrikgebäude)に、いっばいとなり、その悪

魔的力は、その巨大な肢体のいと狂重・謹厳な運動によって最初には隠されているが、その無数の本来的作業器官の熱狂的乱舞において爆発する。」（『資本論』第一部、青木文庫版第三分冊六二四―六二五ページ。傍線は引用者）

Ⅲ 現代巨大産業資本の直接的生産過程が実現されている  
独自の生産単位

ここでの課題は、以上のような『資本論』で表象されている工場を基準としてみたとき、現代巨大産業資本の直接的生産過程が実現されている独自の生産単位Ⅱ、巨大生産単位がどのような発展形態をとっているといえるかということである。

ここでの分析の前提。――

第一 巨大産業資本Ⅱ、巨大産業企業とし、以下後者を対象として分析する。

第二 分析対象をさらに日本の場合に限定する。この場合、使用総資本一、〇〇〇億円以上の企業を巨大企業とする（この基準は、普通行われている資本金一〇〇億円以上の企業Ⅱ巨大企業という基準とはば一致する。）

第三 巨大産業企業の直接的生産過程が実現されている独

共同研究室

自的な生産単位Ⅱ巨大生産単位を、投下資本一〇〇億円以上の生産単位とする。

以上の前提の上に立って、以下、もっぱら巨大生産単位の発展形態をあきらかにする。

(1) 第一次的検討

とりあえず、ここでは五つの基幹的産業、鉄鋼業、化学工業、繊維工業、自動車工業、造船業を対象として、巨大生産単位を類型化し、その代表的類型を抽出する。以下に、代表的類型を列挙する。――

A 鉄鋼業……①鉄鋼一貫製鉄所

②製鋼・圧延製鉄所

B 化学工業……①アンモニア関連製品一貫製造所

②石油化学コンビナート

C 繊維工業……合成繊維一貫製造所

D 自動車工業……①完成車一貫製造所

②車体・完成車製造所

E 造船業……①一貫造船所

②船体・完成船造船所

巨大生産単位のこれらの代表的類型を検討の結果、それら

二一九（七九九）

がすべて工場結合体であること、しかもそれらは基本的に巨大生産単位としてのみ存在する工場結合体であること（したがって、いわば縮少された規模での工場結合体としては一般的には存在しないものであること）が検出される（ただし、以上の中で、鉄鋼業における②製鋼・圧延製鉄所のみは例外で、縮少された規模での工場結合体として一般的に存在しており、むしろ巨大生産単位としてのそれは例外的である。工場結合体といっても、二つの場合があることに注意）。このことから、あきらかに『資本論』における分析対象の歴史的制約性が予想される。

## (2) 第二次的検討

しかし、以上のように巨大生産単位が工場結合体であるということから、ただちに『資本論』における分析対象の歴史的制約性Ⅱ現代の『資本論』のための新たな分析対象設定（すなわち、工場にかえて工場結合体を分析対象とするということ）の必要性を結論づけることはできない。なぜなら、一九世紀中期段階Ⅱ『資本論』成立当時においても工場結合体は存在していたからである。――

例 綿紡織業……紡織兼営「工場」

製鉄業……銑鍊一貫製鉄所

（これらの存在について具体的には、堀江英一編著『イギリス工場制度の成立』一九七〇年、ミネルヴァ書房、第一章、第一章を参照。）

したがって、問題は、――

第一 なぜ『資本論』は、現実中存在するもつとも発展した生産単位としての工場結合体を単独の工場の次元に解消して分析対象としたか。

第二 このような一九世紀中期段階の工場結合体とくらべて、現代の工場結合体は単独の工場に解消して把握できないような独自性をもっているかどうか。

以上の二つにしぼられる。

第一の問題について。一九世紀中期段階の工場結合体は、労働過程・生産物の点で単独の工場に対する独自性をもっていなかった。すなわち、工場結合体を編成する工場は、単独の工場に分解した形態でも存在し得ていた。したがって、この段階の工場結合体は、単独の工場の単なるよせ集めⅡ形式的工場結合体であった。したがってまた、それは、理論的には単独の工場に解消して把握することが可能であった。

第二の問題について。現代の工場結合体は、一九世紀中期段階のそれとはあきらかに異なり、基本的には単独の工場で

は実現し得ない、独自の労働過程・生産物を実現している。  
すなわち、工場結合体を編成する工場は、単独の工場に分解した形態では存在し得ていない。したがって、現代の工場結合体は、それ自体が一個の固定化した生産単位 $\parallel$ 実質的工場結合体である。したがってまた、それは、理論的にも単独の工場に解消しては把握することができない性格のものになっている。

(本報告に関連して、本誌第二〇巻第五・六合併号所収の拙稿「現代巨大企業における社会的労働過程のプロセス構造」、および本誌第二一卷第三・四合併号所収の拙稿「『資本論』における産業資本の直接的生産過程論」を参照。)

▼本年度(昭和四七年四月以降四八年三月迄) 会員が本誌以外に発表した業績は次のごとくである。

芦田文夫

社会主義的所有論の若干の問題

△△経済▽▽ 昭和四八年一月号

足立政男

家訓は生きている

△△プレジデント▽▽ 第九巻・第六号

共同研究室

老舗の家訓から見た企業永続の秘訣

△△経営と道徳▽▽ 第十三号

家訓が語る企業永続の秘訣

△△近代経営▽▽ 昭和四八年一月号

大藪輝雄

ECC 農業市場の形成とマンスホルト・プラン

△△近代農業と小農問題▽▽ 所収

山雪会 昭和四七年六月

ECC 農業政策の新展開

△△経済▽▽ 昭和四七年七月号

岡崎栄松

私のすいせんする必読書

△△経済セミナー▽▽ 昭和四七年四月号

マルクス経済学の基本的性格

資本の循環

『新マルクス経済学講座』 第一巻

有斐閣 昭和四七年五月

小野一郎

生産部面における社会主義国の労働組合

二二二 (八〇一)

立命館経済学(第二十一卷・第六号)

二二二(八〇二)

△労働・農民運動▽ 昭和四八年三月号

労働組合運動の当面している政策的諸問題

小檜山政克

△労働・農民運動▽ 昭和四七年一〇月号

「ソ連経済改革と「商品・貨幣関係」

発達した資本主義国における労働組合運動の現段階

△経済研究▽ 一橋大 第二四卷・第一号

『現代の労働組合運動』 第三集

小牧聖徳

日本資本主義の高蓄積と賃金の国民的相違

中小企業金融対策部会報告書

△経済▽ 昭和四八年三月号

京都府中小企業対策協議会 昭和四七年一二月

後藤 靖

後藤象二郎

自由民権運動

△ブリタニカ大百科辞典▽ 昭和四七年

国家権力と生活防衛

『日本生活文化史』講座

河出書房 昭和四八年三月

戸木田嘉久

「実践的労働組合主義」批判

△月刊金属労働資料▽ 昭和四七年八月号

現代帝国主義と労働組合運動

△経済▽ 昭和四七年一〇月号